

『三つの願い』(ルカの福音書 8章 26-39節) 2020.5.24.

<はじめに> 祈りは私たちと神を結ぶ絆です。祈りのすばらしさを、私たちはどこに見出しているでしょうか。この箇所には三者三様の祈りをイエスに告げています。祈りは自分の願いを神に何でも告げることから始まります。願い通りに聞かれた祈りもあれば、聞かれなかった祈りもあります。

I 苦しめないで(28-33)

①この人から出て行くように(29)

汚れた霊はこの人を捕えて、やりたい放題に暴れていました。イエスが来られ、悪霊に彼を解き放つようと命じられました。彼はイエスがいと高き神の子であると知っていました。彼とイエスには信頼関係はありませんが、イエスは悪霊も支配される権威をお持ちです。

②許してください(31-33)

悪霊どもは、自由に振舞える時に限りがあり(黙 12:12)、最後には底知れぬ所に投げ込まれることも熟知していました。だから、今しばらくは豚の群れの中に移ることを懇願し、イエスもそれを許可されました。なぜイエスは悪霊の願いを聞き届けられたのでしょうか。

③自由という名の制約

自由と主導権を保ちたいと願うのは、人の常です。それが神様とぶつかる時、私たちはどうするでしょうか。自由と主権を保てる領域に移ることを求める人に、主は無理強いされません。自由意志を人に与えられた主は、あえてそれをも許されます。

II 出て行ってほしい(34-37)

①驚きの出来事

豚飼いやその地域の人々は、豚の群れの突然死に驚いて出て来たところ、悪霊の去った男がイエスの足元に服を着て正気に返り座っているのを見ます。彼が救われた顛末を知ると、彼らはイエスがこの出来事の張本人とわかると、出て行ってほしいと願いました。

②何が一番大切なのか

かつて彼を鎖や足かせでつなぎ、何とかしようと試みたにもかかわらず、悪霊の去った男を喜ぶ者は見られません。不思議な御業を見て、神を讃える声も聞こえません。なぜ彼らはイエスに出て行ってほしいと願ったのでしょうか。彼らの望みは何だったのでしょうか。

③与えられた機会

イエスは彼らの願いを聞かれ、舟に乗り込まれます。主は彼らの残念な願いさえも聞き届けられます。ゲラサ地方を主が再び訪れた記録はありません。主よりも自分を優先させる祈りは、貴重なチャンスを失わせてしまいます(イザヤ 55:6、エペソ 5:15-17 参照)。

III お供をしたい(38-39)

①しきりに願った

辛く苦しい記憶ばかりでも、生まれ育った故郷を離れる決意は尋常ではありません。それ以上にイエスとともに行きたい、弟子の一人になりたいと願いました。しかし主は、そんな彼の願いを聞き届けられず、彼の意とは異なる道を示されました。

②神との語らい

祈りは一方的に神へ自分の願いを伝えることではありません。神との会話、語らいです。重荷・必要・課題を神に聞いていただくだけでなく、神から聞く場です。自分の願いと神の計画が違うことに気づいたことがありますか。その時、どうしましたか。

③イエスの足元に座す

願いが聞かれることに重きを置いたなら、自分本位に神を動かそうとする誤解(高慢)が入り込んで来ます。足もとに座るとは、しもべとなって主人の言葉を待ち望む姿です。聞いたしもべは、それを実行するのです。神が主であり王であることが、そこに現わされます。

<おわりに> 願いが聞き届けられることばかり注目してませんか。すぐに祈りが聞かれない時は、神が私たちに語り掛けたく願っておられるかもしれません。「主よ、お話しください。しもべは聞いております」(I サム 3:9)と申し上げ、主の御思いを受け取ることができるでしょうか。(H.M.)